

# 生きがいに関する一考察

山 本 典 子

## 1. はじめに

カウンセリングを必要として来談するクライアントから、老若男女を問わず、「生きる意味がわからない」、「何のために生きなければならないのか」、「仕事にも日々の生活にも、やりがいが見いだせない」、「やりたいことが何も無い」、「将来に希望がもてない」といった訴えがしばしば聞かれる。

人間は思わぬ災難にあったり、大切なものを失って耐え難い孤独や悲しみ、苦しみに苛まれたりすると、生きていく意味を見失ってしまうことがある。そのような大きな苦難に直接的に晒されなくとも、ふと立ち止まったときに、急に自分の存在意義に疑問が生じ、いいようのない不安や焦燥感に飲み込まれそうになることもある。

生きる意味をあらわす言葉のひとつとして、「生きがい」がある。『生きがいについて』の著者の神谷美恵子は、「わざわざ研究などしなくても、はじめからいえることは、人間がいきいきと生きていくために、生きがいほど必要なものはない、という事実である。それゆえに人間から生きがいをうばうほど残酷なことはなく、人間に生きがいをあたえるほど大きな愛はない」（1980, 11頁）と語っている。

古来より多くの論客たちが「個性化」、「自己実現」、「態度価値」などといった様々な用語を用いて、人間が人間として生きる上で志向すべき目標やその過程で道標となるものについて説明してきた。人間は一次的な欲求に従ってただやみくもに生きるのではなく、たとえそのために苦しんだり傷ついたりすることがあろうとも、より崇高な次元の意味や価値を求めて歩みを進める。「生きがい」は、広い意味では、それらすべてを包括するような、人生の原動力とも目標ともなりうるものとも解釈できる。

「生きがい」は、哲学や精神医学、心理学などにおける専門用語とは違って、日常会話の中でごく当たり前に使われる言葉である。誰もがその意味するところを知っており、それぞれが生きていく上で必要であることも知っている。生きがいの中には、毎日の生活に彩りを添えるための趣味のような身近で比較的獲得が容易なものから、一生をかけて達成に挑むような次元のものまであり、同時に複数を見いだし、人生をより豊かにしていくことも可能である。

このように、誰の人生にも大小さまざまな生きがいとなりうるものが存在し、誰もがそれを見いだし達成していく必要性を感じていながら、ときとしてひとつも見いだせなくなって人生に絶望することも、或いは、崇高な生きがいとなるべきものを見逃しつつも小さな生きがいひとつで喜びに満ちた日々に感謝することもある。

本稿では、人がそれぞれの人生の中で、いかに生きがいを見いだし、いかに人生を生きるかということについて考察を試みる。

## II. 生きがいとは

「生きがい」という言葉は、『広辞苑』では『『生き甲斐』①生きるはりあい②生きていてよかったと思えるようなこと』と定義されている。しかし、神谷は「生きがい」について、こうした「論理的、哲学的概念」では説明しきれないニュアンスをこめ、「もっと具体的、生活的なふくみ」のある「生存理由」という言葉で説明している（1980, 15頁）。

人間は過去から未来へと向かう時間軸の上を、様々な方向性や速度、密度などのベクトルをもって生きているので、その「生存理由」たる「生きがい」は静止した点で表されるものではなく、見えたと思ったら見えなくなったり、神々しいまでに光り輝くかと思えば闇をもたらしたり、重くのしかかってくるかと思えばふわふわと霧散してしまったりと、刻々と姿をかえつつ見え隠れする動的な概念であるといえる。

生きがいがないければ生存できないかということ、そういうわけではない。たとえば、災害や飢饉といった危機的状況にあって、自分の生きがいについて考え

る余裕など全くないとき、人は本能に従ってただ生命をつなぐためだけに奔走することを厭わない。しかし、見方を変えると、そのようなときには、できるだけ多くの食料を確保したり、安心して眠れる場所を探したりすることが、無意識のうちに生きがいになっているのかもしれない。或いは、理屈ぬきで、力を尽くして状況を少しでもよいものにかえていくことが自然に生きがいとなり、やがてただ自ら或いは近親者の生命をつなぐ一次的な欲求を満たす目的からいつの間にか形を変え、他者の救済や、精神面での充実を目指していくといった、より次元の高い行為へと結びついていくこともある。そう考えると、生きがいがなくとも生きられる場合があると切り切ってしまうより、生きがいを意識しなくても生きられる場合があると表現をかえたほうが理にかなっている。

しかし、一旦危機的状況を脱し、ふと考えたときに自らの生きがいが見いだせないと、人は足場を失ったかのように不安定な状態になることがある。神谷は「今まで生存目標としていたものがうしなわれるとき、ひとはもはや何のために生きて行くのか、何を大切に考えるべきか、その判断の基準もわからなくなる」(1980, 114 頁)と表現している。

逆に、毎日の生活に特に問題がなく、適度な喜びや幸福感を伴う時間が平穩無事に流れているときには、多くの人は自分の生きがいの有無やその内容について意識的に考えたり、思い悩んだりしない。しかしなんらかの理由でひとたび自分の生きがいや存在理由に疑問を抱くようになると、急に目の前が真っ暗になり、それまでの価値観がくずれてしまうこともある。失って初めてその存在の大きさ、必然性に圧倒されるパターンである。

いずれにしても、生きがいの喪失を体験すると、人は自分自身、周囲の人、自分のおかれた状況、未来など様々なものに対して否定的になる。その打撃があまりにも急激であったり、強烈であったりすると、生きる気力を失って、死を選ぶ人すらいる。しかし、多くの人がその危機を乗り越え、生き続けていく。その力はどこからくるのであろうか。

次章では、生体腎移植のドナーとなった女性 A さんの事例を用いて、「生き

がい」について考察を試みる。筆者は生体腎移植の患者を対象とする心理的な援助体制の構築を目的とするインタビュー調査でAさんと出会い、その体験についてなるべく自由にAさんに語ってもらう形で話をきいた。なお、Aさんからは、研究目的での情報の公開の了承を得ているが、プライバシー保護のため、事実の一部に改変を加えている。

### III. 事例：Aさんの場合

事例中、「 」内はAさんの発言、< >内は筆者の発言、『 』内はその他の人物の発言を示す。また、インタビューを行った年をX年とする。

#### 1. 事例の概要

Aさんは50代後半女性。自営業を夫と共に営んでいる。X-1年に夫（60代前半）に腎提供。当時の同居家族は夫のみ。既婚の長男（30代前半）、長女（20代後半）が近隣に住んでいる。

Aさんは地方の「集落をまとめるような」裕福な家で「わがまま放題」に育ったが、多くの人が家に集まってくるのが嫌で高校卒業後、親戚を頼って都会に出て事務の仕事をしていた。そこで出会った現在の夫の「アプローチがすごくて」20代前半時に「流れるごとく」結婚したが、「物事を深く考えない」夫とは結婚当初から価値観が合わなかった。「夫婦は最も他人。交わることはない」。しかし、「私らは移植したために交わってしまった」。

頑健だった夫がX-10年に高熱を出して病院に行くと、「すぐ透析が必要な状態」となっていた。X-9年に透析を開始。X-2年に夫が透析病院で移植の情報をきいてきて、家族全員の前で『どう思う？』と話を切り出したところ、長男が『自分のをやる』と言い出したので、Aさんも「簡単に、私も、と言ってしまった」。すると夫が「それをぱっととってしまって」、Aさんが腎臓を提供することに「決まってしまった」。夫も子どもたちも妻であるAさんがドナーになることを「当たり前」のように考えており、話は「とんとん拍子に進んだ」。

Aさんの腎臓摘出手術は内視鏡で行われた。医師の事前の説明では『簡単に済む』ということであったが、手術後は今までに経験のない痛みと身動きのとれないだるさで「大変」だった。家族からのサポートは「あったんでしょうけど、気がつかないですよ」。Aさんの支えになったものは長男が学生時代に交通事故にあって生死の境をさまよった際に出会った宗教への「信仰」であった。この「信仰」はAさんが日々の生活を送る上で欠かせないものとなっており、「元々の自分の気性を曲げて」「無理して」夫に合わせるようにしている。

移植は「成功」し、夫は元気になり、家業の経営状態もよくなった。「信仰」に「相手に喜んでもらえる生き方をすべし」、「難儀は夫婦仲の悪さからくる」という教えがある。長男の事故のときにも、その教えを守ってAさんが「無理して」夫にあわせるようにしたことで、20日間意識不明だった長男の意識が回復した。今回の夫への腎提供は「やってよかったんでしょう、きっと」。また、移植をしないで夫が死んでしまっていたとしたら、「試練がきたときに、そこに結びつけるかもわからない」し、「子どもたちに『お母さん、元気やったんやからやっときゃよかった』と思われるのも嫌ですよ。ね。(中略) だから、いい人生の選択をしたんじゃないかな」。

しかし、「簡単に考えた末が、今、これ」。家族からのいたわりの言葉はなく、夫からは感謝の一言もない。「『愛してるよ』、『お前のお陰で』、『悪かったな』というような一言がどんだけの活力になるか」。日に日に元気になっていく夫をみている自分はストレスがたまり、「そんなに元気になったんは私のおかげんやんか」という思いが処理できず、「心をコントロールするのが難しくなった」し、「体力にも自信がなくなった」。しかし、夫が尿量、薬の時間などに「感心するぐらい」注意を払っているのをみると、「感謝の気持ちはあるんだろう」と、「ちょっとは救われる気持ち」になる。

「いろいろあった」が、移植の結果については「100点満点で満足」している。「私の役目は終わった。(中略) これ以上何ができる？」とAさんは笑顔を見せた。

## 2. 事例の考察

上記の事例は、筆者が拙稿「生体腎移植のドナーが『イエス』と言うとき」(2014)において、人が「人生にイエスと言う」こと、つまり、自らの運命をあるがままに引き受け、肯定することについて論を展開するために用いたものである。その論を踏襲しつつ、新たな角度からの見方を加えて、「生きがい」について論じるため、同じ事例についてさらに掘り下げて考察する。

Aさんは、移植の結果について、「100点満点で満足」していると評価しているが、それまでのAさんの語りには、Aさんの失望、苦痛、孤独といった苦悩の要素が多分に含まれており、「満足」の実感が伴わない。

生体腎移植の実施には、ドナーの腎提供が自発的で、揺るぎない意志のもとの決断であることが絶対条件であり、おそらく移植前の医師との面談ではAさんの自発的な意志が確認されているはずである。しかし、移植後の筆者へのAさんの語りの中では、夫への腎提供は確かにAさん自ら申し出たものではあるが、深く考えることなく「簡単に」「言ってしまった」結果、周囲に流されるように「決まってしまった」というニュアンスが強調されている。一見矛盾するようであるが、そのどちらかが間違いであったり、嘘であったりするとは限らない。腎提供をしたという事実はひとつの真実であっても、それに至る動機付けや、それに対する思いは置かれた立場や状況によって時々刻々と変容しうるものだからである。移植医の前で腎提供を申し出る多くのドナーが「自分の意思でドナーになりたくて来た」と述べ、ドナー本人ですら自分自身の腎提供の意思は揺らぎないと思っていたり、多少の動揺はなんとか乗り切ろうと思っていたりするにもかかわらず、後になって、その自発性に問題があることが発覚するケースが少なくない。先行研究では、義理や世間体、情に流されたり(長谷川 2000)、一家のスケープゴートの人物が周囲からの要請に押し切られたり(春木 1986)といった形でやむなく提供することとなっていることが、意識的に、或いは無意識的にカムフラージュされているという指摘がある。

夫婦は「最も他人、交わることはない」存在であるとするAさんにとって、

移植は夫婦が決定的な形をとって「交わる」行為であり、『愛してるよ』、『お前のお陰で』、『悪かったな』といった言葉の通い合うような理想の夫婦像に近づく手段であったかもしれないが、結果的に、Aさんの腎提供という行為はAさんの心を夫からより離してしまう方向に導いている。多くのドナーがレシピエントの健康状態の改善やQOLの向上を第一の目的として挙げるなか、Aさんは、移植後、日に日に元気になっていく夫の姿を見ることが自らのストレスの原因になっているとさえ語っている。また、夫や他の家族からの感謝やねぎらいの言葉もなく、Aさんには満たされぬ思いがある。

しかしながら、Aさんは自らの決断、行為を否定してはならず、「私の役目は終わった。(中略)これ以上何ができる?」と結論づけている。そう思わなければやっていけないという自我の防衛機制が働いての発言であったとも考えられる。しかし、自分の力ではどうにもならない運命にみまわれたとき、人間はその意味を求め、葛藤し、苦悩するものである(山本2014)。それは、自らの生きがいを、過去から現在、そして未来へと広がる人生の中に求める過程での苦悩ともいえる。腎提供という行いによってAさんが失ったもの、得られなかったものは大きく、この時点のAさんの発言には、苦悩を苦悩として引き受けること、理不尽な運命を含む自らの人生をありのままに受け入れることに対する抵抗が垣間見られる。

それでもAさんが決して投げやりなかんじではなく、「やってよかったんでしょう、きっと」と語ったのは、Aさんに「信仰」という拠り所があったからではなかろうか。Aさんの「信仰」には、「相手に喜んでもらえる生き方をすべし」、「難儀は夫婦仲の悪さからくる」といった生き方をかなり具体的に指し示す教義があるという。神谷が指摘するように、人間には苦悩の中にも意味を求める欲求があり、そういう人間を納得させるために古来より様々な宗教や思想によって、苦しみに意味づけがなされてきた(1980)。Aさんには、過去に「信仰」の教えを守って、「無理して」夫に合わせることによって長男の交通事故による危機的状况を脱することができたという経験があり、今回も「信仰」によって自らの行為を意味づけ、意識の上では「100点満点で満足」と評価

していると考えられる。

そうしながらも、「心をコントロールするのが難しくなった」とAさんが感じざるを得ないのは、おそらくそこにAさん自身の自由な意志、自由な決断、自分自身の価値観が欠如しているからであろう。Aさんの語る「信仰」は、合理的、実証的な真理を超えた古来の神や宗教のもつ人智の及び難い力というよりは、「〇〇すべし」というはっきりとした行動の指針となるものであり、後に続く出来事の幸不幸とは因果関係で結びついている。勝田の言うように、「心理的な問題を単に過去との因果関係の中だけで解決しようとすることは、人生を後ろ向きに歩いているようなもの」であり、「現在の切実な問いかけには全く答えることができない」（2002, 39頁）と考えられる。また、梶川の指摘するように、意識的な生きがいは、ともすれば、生きることを過剰に手段化してしまい、人生そのものの本質をないがしろにしてしまうことになりかねない（2014）。地方の裕福な家で「わがまま放題」に育ち、「流れるごとく」結婚、そして家族の意見や信仰している宗教の教えに流されるように生きてきたAさんであるが、「簡単に考えた末が、今、これ」という因果にAさんはストレスを感じている。

神谷は「置きかえ」（1980, 182頁）という言葉を用いて説明しているが、「自分のうちにさまざまな可能性を持っている人間は、一つの生きがいをうしなえば、ほかの方向に生きがいを求める」（1980, 183頁）。インタビュー当時、Aさんは満たされぬ思いを、「信仰」に従った生き方を志向することで「満足」に置きかえ、心のバランスを保っている様子であった。その後、Aさんが「流れるごとく」、「信仰」に生きるのではなく、そこで与えられた意味や価値に気付き、それに応えることができるようになれば、今度は実感として生きがいをともなった人生を自分のものとして引き受け、生きていくこととなるであろう。

#### IV. まとめ

人が生きていくなかで、苦痛や苦悩を感じざるを得ない局面が多々訪れる。



苦痛や苦悩の程度が軽く、明るさにあふれる生活を謳歌しているときや、全身全霊をかけて打ち込めるような何かに没頭しているときなどには、意識的にせよ無意識的にせよ、そういったものをあえて見ようとしなかったり、上手に気をまぎらわせたりして、心に大きな痛手を負うことなくやりすごすことができることも多い。しかし、どうしても抗うことのできないような重圧に喘ぐとき、その人の運命と生きがいとの関係が問題になる。

運命は、因果関係などを超え、ときに理不尽としか思えない形で私たちの人生に立ち塞がることもある。神谷も指摘するように、運命は必ずしも悪いものばかりをもたらすわけではない（1980）。しかし、人はとかくよいことは当たり前のこととして受け流すのに対し、過酷な運命については、簡単にやり過ごすことができない。そして、そのような人間の意志を超えた力の作用は、単に外側から与えられる現象のみではなく、それをいかに受けとるかというその人の内なる力によって意味づけられる。そのことを神谷は、「外的な運命と内的な運命との出会いというべきもの」と表現している（1980, 98頁）。同じようなことをFranklは、『『人生の意味とは人生そのものである』』と言うとき、この命題に二度出てくる「人生」という言葉の意味が一度目と二度目とは違っているのです。一度目は事実的な人生という意味であり、二度目は自由意志的な人生という意味なのです」（訳書2004, 110頁）と説明している。人が生きていくなかで起こる様々な出来事や事象を受けとめ、その意味、すなわち生きがいを見いだし、実現していくことで、自らの本質に意味づけがなされるものと言い換えられる。

不思議に満ちた自然界において、「他の植物や動物はいわば不思議そのものを生きている」（山田2002, 324頁）のに対して、人間はその不思議さを科学の力で合理的に説明しようとしたり、神や創造主による御業として畏れおののいたりする。しかし、そこで導き出された答えに納得がいかず、運命に意味や価値が見いだせなくなると、人は不思議そのものをただ生きることが困難であるため、「生きがい喪失状況」（神谷1980, 112頁）とも表現されるような悲嘆や苦悩を伴った状態に陥りやすい。未来に希望がもてなくなり、過去にこ

だわったり、運命の理不尽さを呪ったりすることで、説明のつかない不安をなんとかかめあわせようとする。肉体的な、或いは、精神的な苦しみが多量に大きいと、その前に屈してしまって、自暴自棄になったり、自殺を企てたりする場合さえある。しかし、人間は元来、意味を求める欲求が強く、時の経過とそれに伴う環境の変化に癒されながら、再び納得のいく答えを導き出そうとする。見えなかったものを見るため、価値が見いだせなかったものに価値を見いだすためには、古い価値基準から解放され、新しい価値体系を作り出す必要がある。

Frankl は生きる意味について、「創造価値」、「体験価値」、「態度価値」の3つの価値によって説明している。「創造価値」とは、「なにかを行うこと、活動したり創造したりすること、自分の仕事を実現すること」によって生じるもの、「体験価値」とは、「なにかを体験すること、自然、芸術、人間を愛すること」によって生じるもの、と定義される。そして、「態度価値」とは、「自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるか、その事実はどう適応し、その事実に対してどうふるまうか、その運命を自分に課せられた『十字架』としてどう引き受けるかに、生きる意味をみいだすこと」によって生じるものと定義されている（訳書 1993, 72-73 頁）。やや乱暴ではあるが、前出のAさんの体験を図式的にあてはめて考えると、Aさんの腎提供という行為は、Aさんが夫婦が「交わる」ことや、家族からの「感謝」などを望んでいるとしたら、現在のところは喜びにみちた「創造価値」、「体験価値」を実現しえたとはいえない。「信仰」も、Aさんの行き方の指針となっているが、神谷のいうところの、「抑制、強制、服従というような消極的な宗教的感情」（1980, 231 頁）の域を脱しておらず、Aさんの心の内面からわき出てくるような「生きがい」になっているとはいえない。しかし、その苦悩を含む運命をあるがままに受け入れることができたとき、Aさんは「態度価値」を実現し、生きがいのある人生を生きることができるようになると考えられる。

Frankl は著書の中で、「かわいそう」な病人に対して、「あなたが彼を助け

るなら、それは無意味感を振り払うためでしょうか。それとも、ただ、そうせずにはいられないからでしょうか。つまり、あなたは、その病人に対する同情そのものになっているのです。あなたは、そのとき、ほかの人を助けるといふ価値そのものになっているのです。これこそ価値の実存的根源です」（訳書 1997, 129 頁）という例を示している。阪神淡路大震災や東北大震災のおりには、自分の家が倒壊しているにもかかわらず、近所の困っている人を放っておけなかった人、遠くから仕事を休んで現地に駆けつけたボランティアなど多数の人が、「ただ、そうせずにはいられないから」無私無欲の行動を起こした。Aさんも、夫への腎提供を「簡単に、私も、とやってしまった」時点では、「ただ、そうせずにはいられな」かったのではなかろうか。

人間は、そのように、人生からの問いかけに対して、無意識のうちに答えを出して、自らの行動に結びつけることができる存在である。差し迫った状況であればあるほど、真剣に打ち込めば打ち込むほど、「私の生きがいは〇〇です」と言葉にしたり、「こういう場合は〇〇すべき」というような合理的な正解を求めたりすることなしに、運命を受け容れ、意味を超えた意味の世界に身をおくことができる。しかし、人間はまた、そのあるがままの状態をあるがままに受けとめかねて、自らの運命や行為に何らかの意味づけや価値判断、理由付けなどを加えたい衝動を抑えきれない存在でもある。そうなると、「ただ、そうせずにはいられ」ずに行った行為にも、何らかの理由や意味、そしてその結果を求めることになる。無意識が意識の世界に引きずりだされ、運命や人生を一旦対象化するプロセスが必要になるのである。そのプロセスにおける恨みや憎しみ、後悔、不満といった苦悩の果てに、「自我を超えた大きな力に統合され、またはこれに融合したと感じ」（神谷 1980, 243 頁）ることができてこそ、人間は生きがいや生きる喜びを意識することができるといえよう。

神谷は言う。「たとえもし現世のなにごとにも、なんびとにも、自分が役に立ちえないとしても、いいあらし難いあの『瞬間』に、至高の力に支えられているのを感じたならば、その力のなかでただ生かされているというだけで、しみじみと生きがいをおぼえ、その大いなるものの前に自己の生命をさいごま

で忠実に生き抜く責任を感じるであろう。たとえもし自分で自分の生の意味がわからなくても、その意味づけすらも大いなる他者の手にゆだねて、『野のすみれのように』ただ大地にすなおに咲いていることにやすらぎとよろこびをおぼえるであろう」（1980, 263頁）。

人間は上記にあげたような災害や移植といった危機的な状況にのみ、生き方を問われているのではない。人生のあらゆる局面で、もっといふならば、生きていく間、時々刻々と様々な選択をせまられ、そして生き様を問われている。そのすべてを意識化したり、言葉による意味づけをしたりする必要はなく、ただ生きるということの中に生きがいがあるという信頼感さえあれば、己の生を生き抜くことができると思う。

## V. おわりに

心理臨床に携わる者として、「生きがい」について考えることは必要欠くべからざる課題である。昨年度の「人生にイエスと言うこと」についての考察を深める試みとして論を展開してきたが、このような大きな問題への取り組みとしては未だ不十分であり、筆者自身がその問いかけに答えていく入り口にやっとさしかかった段階にすぎない。

実証性や合理性が珍重されがちな現代社会の中では、ともすれば「生きがい」という言葉そのものが一人歩きをしてしまい、皆が「生きがい」を指針に世のため、人のためになる生き方をすべしというふうに考えられがちである。しかし、「生きがい」とはその人の存在価値や有用性を決定づけるような指針ではない。自分に与えられた生命を誠実に受けとめ、うちに秘められた生きがいからの声に気づき、耳を傾けてこたえていくことが、人間が人間らしく生きていくうえで重要になる。

冒頭に挙げた「生きる意味がわからない」、「何のために生きなければならないのか」といったことに悩むクライアントに対して、カウンセラーがすべきことは、生きがいを与えたり、生きがいを感じられるように教え導いたりすることでは決してない。その人の生に土足で踏み込むことなく、その人が自分に与

えられた運命を引き受け、生きているということを心から感じることが出来るまで語りに耳を傾け、迷ったときには共に考え、そしてそのときが来るのを一緒に待ちつつ支えることのできる臨床家を目指し、今後も研鑽をつみたいと考えている。

付記：関係者のプライバシー保護の観点から、本稿中の事例の引用は差し控えてください。

## VI. 参考文献

Frankl, V.E. 1947. “…Trotzdem Ja zum Leben sagen” 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993.

Frankl, V.E. 1977. “Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager”, … trotzdem Ja zum Leben sagen. 池田香代子訳『夜と霧』みすず書房 2002.

Frankl, V.E. 1984. “Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee.” In Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie002E 山田邦男、松田美佳訳『苦悩する人間』春秋社 2004.

Frankl, V.E., Kreuzer, F. 1986. “Im Anfang war der Sinn—Von der Psychoanalyse zur Logotherapie”. 山田邦男、松田美佳訳『宿命を超えて、自己をこえて』春秋社 1997.

春木繁一. 1986. 「生体腎移植の家族精神医学—レシピエント、ドナーの手術前不安を中心に (II)」『臨床透析』Vol.2, No.9, pp.1503-1509.

春木繁一. 1995. 「腎移植にともなう精神医学的問題—日本の移植医療における場合」『現代のエスプリ』Vol.340, pp.89-100.

長谷川浩. 2000. 「臓器移植とヒューマンケア」岡堂哲雄編『現代のエスプリ別冊 患者の心理 ヒューマンケア 心理学シリーズ』至文堂, pp.132-142.

Jung, C.G. 1939. “Bewusstsein, Unbewusstes und Individuation”, Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, XI-5, pp.257-270. 林道義訳「意識，無意識，および個性化」『個性化とマンダラ』みすず書房 1991,

pp.49-70.

Jung, C.G. 1952. Antwort auf Hiob, Rascher Verlag. 林 道義訳『ヨブへの答え』みすず書房 1988.

梶川哲司. 2014. 『『それでも人生はイエスと言う』をめぐって ～神谷美恵子の生きがい論を手がかりに』 フランクル研究会発表

神谷美恵子. 1980. 『生きがいについて』神谷美恵子著作集 1 みすず書房 (注: 初出は 1966 年)

神谷美恵子. 2014. 『人間をみつめて』河出書房 (注: 初出は 1974 年)

勝田茅生. 2002. 「鷹と鶏 ―ロゴセラピーの実践」山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社, pp.28-61.

日本移植学会広報委員会編. 「臓器移植ファクトブック 2014」

新村出編. 2008. 『広辞苑』第六版 岩波書店

山田邦男. 1999. 『生きる意味への問い――V・E・フランクルをめぐって』佼成出版社

山田邦男. 2002. 「原題の精神状況とその超克――フランクルを手がかりとして」山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社, pp.290-349.

山本典子. 2010. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 ―グリムのおとぎ話『七羽のからす』をとおして―」『Humanitus』Vol.35, pp.39-49.

山本典子, 高原史郎. 2010a. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察I 腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.157-162.

山本典子, 高原史郎. 2010b. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察II 腎提供という体験」『今日の移植』Vol.23, pp.277-282.

山本典子. 2011. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 ―C.G.Jung『ヨブへの答え』をとおして―」『Humanitus』Vol.36, pp.23-33.

山本典子. 2012. 「医療の現場における臨床心理学の研究について ―生体腎移植に関する研究における一考察―」『Humanitus』Vol.37, pp.39-52.

山本典子. 2014. 「生体腎移植のドナーが『イエス』と言うとき ―Viktor

E. Frankl『それでも人生にイエスと言う』を援用して－『Humanitas』 Vol.39, pp.21-34.